

中ノ口川河川公園整備ワークショップ

新潟地域振興局地域整備部巻分所(平成 14～16 年度実施事業)

整備後の維持管理を地域住民が主体的に取り組んでいる事例①

◎事業の全体像

新潟地域振興局地域整備部巻分所(旧巻土木事務所)が、燕市と協力して、燕市大曲地区の中ノ口川左岸側の河川敷(高水敷)を利用した河川公園を県民参加で整備した事例。

初年度(H14 年度)は、公園計画に先立ちワークショップを開催し、地域住民から頂いた意見をもとに計画図面を作成。

H15 年度は、この河川公園の活用方法について引き続きワークショップを開催し、地域住民からたくさんの「利・活用のアイデア提案」を得る。

そして H16 年度には、6 月に前年度のワークショップに参加した住民を対象に、「公園利・活用アンケート」を実施したところ、「公園の活用、維持管理」をキーワードとした意見が多く見られたことから、「公園の利・活用(活用、維持管理など)」をテーマに、具体的な活動をどう行っていくか、具体的な実験イベントの開催を含めたワークショップを開催した。

◎事業による成果

H16 年度のワークショップ最終回で、参加者を中心とした「大曲河川公園ファンクラブ(以下、公園ファンクラブ)」が結成された。

この公園ファンクラブは、大曲河川公園を市民が主体となって行政とともに育てていく組織であり、3 力年にわたったワークショップの集大成でもある。このことは、参加者の公園に対する熱意や愛着の表れであり、その熱意と愛着は、公園ファンクラブ結成(12 月 12 日)直後の 12 月 19 日にイルミネーション点灯式として活動がなされたことから伺える。



《各年度の事業展開&ポイント解説》

◆平成 14 年度：河川敷公園計画づくりワークショップ



ポイント！

最終的に「参加者による住民組織発足」という成果が得られた背景には、初年度のワークショップにおける参加呼びかけがポイントであった。行政側から様々な分野の団体に呼びかけた結果、バランスのとれた人材(熱心な方、専門スキルを持っている方など)が集まり、その後の展開に大きく影響した。

事業終了後の展開を考えると、ワークショップの参加者集めの段階から入念な準備が必要になることを、この事例では示している。

◆平成 16 年度：河川公園利活用ワークショップ



第1回ワークショップ(H16.10.17)

現在までの整備状況の説明や参加者による公園利・活用のための意見交換が行われ、実体験に向けたいくつかの具体的な提案があった。また、参加者の「発案」により、ワークショップ後には現地の見学も行った。

第2回ワークショップ(H16.10.31)

11/28の植栽体験に先立ち、先進地である中之口村長場を視察し、現地の維持・管理を行っている小吉水辺の会との交流をはかった他、鳥屋野潟スポーツ公園において公園シンポジウムに参加。また、帰りのバスの車中では各班に分かれ、植栽体験に向けての意見交換を行った。



第3回ワークショップ(H16.11.14)

11/28の植栽体験に向けて、「植栽、食事、広報」の各3班にわかれ、具体的な準備に取りかかる。当日のプログラムや、スケジュールなどが決定し、これから各班とも植栽体験の成功に向け、それぞれが具体的な活動を実行していくことになった。

第4回ワークショップ(H16.11.28)

過去3回にわたって準備してきた植栽会を建設中の中ノ口川河川公園で開催。当日はみんなで準備してきた甲斐もあり、心配された雨もやんで予想を上回る約200名が参加。植栽会は一般参加者からも好評を博し、大成功を納めた。



第5回ワークショップ(H16.12.12)

3年(H14～H16)にわたり開催してきたワークショップの集大成でもある今回は「みんなで公園の未来に向けて語り合おう」をテーマに開催。みんなで公園を育てていくためのアイデア「何を望むか」「何ができるか」などを話し合った結果、参加者を中心とした大曲河川公園ファンクラブが結成！

ポイント！



ワークショップの中で、参加者の声に柔軟に対応したプログラム変更は、住民側に「言った意見が反映される場である」という信頼感を生み出し、また、住民の主体的な活動意欲を育むことに繋がる。

ポイント！



イベントでは、ワークショップ参加者の特技(例：ネイチャーゲーム達人)が活かされた内容が盛り込まれている。こうした住民の特技が活かされることで、より一層、住民の主体性が育まれる。

その1 行政への不信感を取り払うことからのスタートであった

非常に理想的に進んだ中ノ口川河川公園ワークショップであるが、必ずしも最初から順風満帆に進んだわけではない。初年度のワークショップ開始時は、参加者から「既に行政側で様々なことが決まっているのではないか？」等という行政への不信感が結構あったという。

しかし、こうした不信感を丁寧に解きほぐし（関係者はかなり大変だったようだが…）、着実に地域との信頼関係を構築していったことが、大きな成果を生み出すことに繋がった。

⇒事業開始時には、こうした行政への不信感が蓄積しているケースがよくあるが、それを恐れずに丁寧に地域との関係づくりに取り組むことこそが、県民参加型事業では非常に重要なポイントである。

その2 2カ年の取り組みが下地にあるからこそH16年度の展開が可能

河川公園の計画図作成(H14)、利活用アイデアの提案(H15)という2カ年の取り組みによって、ワークショップ参加者の主体性が着実に育まれた。こうした地道な下地づくりを経ているからこそ、H16年度の実験イベントに約200名もの地域住民が集まった。この背景には、行政側の努力はもちろんのこと、ワークショップ参加者が各々のネットワークを駆使し、積極的に地域住民に参加を呼びかけたことも大きく影響している。

⇒地道な下地づくりがあるからこそ、地域の主体的な活動・官民協働が効果的に動き出す

(担当者からひとこと)

幅広い年齢層からワークショップに参加してもらうために ...



3カ年におけるワークショップ参加者の年齢構成をみると、全体の約8割が50～70歳代（うち、半数が60歳以上）で構成されている。様々な意見を大曲河川公園の利・活用、維持管理に反映させるためには幅広い年齢層からの参加が必要と考える。

現在のところ、結成された大曲河川公園ファンクラブはワークショップ参加者を中心として構成されているが、継続的な活動、およびファンクラブの将来像を考えると、とりわけ若年層の参加が重要と考える。

そこで、これまでのワークショップの運営を踏まえ、若年層を取り込む有効な手段として考えられる事項を以下に挙げる。

- ・若年層を対象とした広報活動の展開（イベント時での募集、コミュニティFM・地域密着型Webサイト等での募集）
- ・親子で参加できるイベント等の実施
- ・地域青年部等との協力
- ・地元小・中・高校との協力（総合学習等での活動体験）等

その3 H16年度事業が住民組織発足への助走・準備的な役割を担った

この事例では、ワークショップ参加者が中心となり大曲河川公園ファンクラブを結成している。この成果を生み出した最大のポイントは、3年目の事業展開である。

行政側としては、2年目のワークショップ（河川公園の利活用アイデアの提案）終了後に、住民組織発足を呼びかけたところだが、本事業では、維持管理の実験イベントの企画・実施というワークショップを更に組み込んだ。

結果として、この取り組みが地域住民にとって、主体的に維持管理を行うためのトレーニングとなり、スムーズに住民組織発足へと繋がったのである。

⇒主体性をもって取り組めるよう、実践の場を組み込んだ

(担当者からひとこと)

将来的な課題として ...

大曲河川公園のような計画段階から事業実施段階にわたり市民参加によって行われてきた事業は、事例が少なく、今後の「行政と市民参加のモデルケース」といえる。今後、大曲河川公園の活動が先進事例として他の地域へ波及するとともに、市民活動への意識が更に向上し、「行政主導の市民参加」から「市民主導による行政参加」へと活動が発展していくことが期待される。

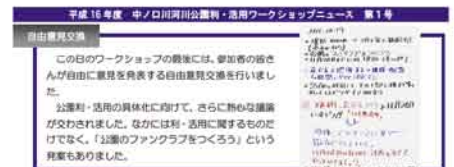
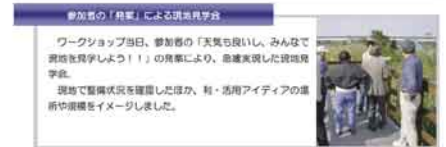
また、大曲河川公園の市民参加による「利・活用、維持管理」を行っていくうえで、行政と市民の新しい関係が必要と考える。公園ファンクラブの今後の組織のあり方としては「行政主導型」から「市民主導型」へと成長することが重要である。「市民主導型」とは行政依存から脱皮し、行政と協調関係を築きながら主体的な意思をもって活動・運営を行うことである。その際、行政には様々な支援制度（市民活動の相談窓口、活動の指導、用具等の貸与など）があることから、そういった事業の更なる推進が必要と考える。

更に、この「公園ファンクラブ」は、「市民主導型」へ移行するための第一歩を踏み出したばかりであるが、最終的には行政から完全に独立した組織（NPO法人等）への発展を視野に入れるべきであろう。（これにより「管理業務」の委託制度の活用も可能となる。）

ポイント！



第1回 中ノ口川河川公園利・活用ワークショップが10月17日に活動者総合福祉センターで開催されました。現在までの進捗状況の説明や参加者による公園利・活用のための意見交換が行われ、来場員に向けたいくつかの具体的な提案がなされました。
今後は提案内容を具体的に行うため、準備を行っていく予定です。
また、参加者の「提案」により、ワークショップ後には現場の見学を行いました。



3年目の事業では、ワークショップ終了後に、こうしたニュースを発行し、地域への情報提供を実施した。

中ノ口川河川公園ワークショップのポイント

- 最初に丁寧に行政不信を解きほぐし、地域との関係づくりを行った。
- 計画図作成・利活用アイデア提案という2カ年の取り組みが、地域の主体的な取り組みを生み出す下地づくりになった。
- 3年目に、主体的な取り組みを促すためのトレーニング事業を実施した。